

ほうがくちょうさがかり

邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察

前 原 恵 美

1. 本研究の目的と手法

1. (1) 本研究の背景と目的

常磐津節研究においては、演奏や演奏者についての歴史的研究が進む一方で、音楽的研究がまだほとんどなされていない。筆者は、その要因の一つに、常磐津節には共通言語としての「楽譜」が確立していないことがあると考えている。実際、『日本音楽大事典』（平野健次ほか監修、平凡社、1989年）は「常磐津節主要現行曲目一覧」として107曲を挙げるが（付表+系図99-102頁）、公刊された楽譜は、邦楽社から6冊7曲（うち2曲は作品のごく一部）が「文化譜¹⁾」の記譜体系で、また1曲が常磐津標準譜本刊行会から「研精会譜²⁾」の記譜体系で刊行されているに過ぎない。前者の文化譜には、《松島》（きしのさどなみなみときわのまつしま）、《戻橋》（もどりはし）、《子宝三番叟》、《三保松》（みほのまつ）（みほのまつふじのあけぼの）、《乗合船》（のりあいふねえほうまんざい）《山姥四季・さがや》があるが、《山姥四季・さがや》は、実際には《新山姥》（たきざおゆうきま）の通称「山めぐり」と呼ばれるくぐり、《将門》（しのびよるこいはくせもの）（忍夜恋曲者）の通称「さがや」と呼ばれるくぐりを合綴したものである。後者の研精会譜は、《将門》（忍夜恋曲者）である。前者は、浄瑠璃の節がごく簡略化して記されており、三味線と浄瑠璃の合い口が曖昧な表記に留まっているため、三味線方の備忘録としての傾向が強い。後者は、研精会の記譜体系を踏襲しつつも、例えば速度の変化をメトロノーム拍数で示したり、浄瑠璃の節まわしを表す記号を考案したりするなどの工夫を試みている。これは相当な労力を要する作業であったと察せられ、実際に刊行されたのは1曲に留まった。こうした常磐津節を取り巻く楽譜の現状は、常磐津節の音楽研究を困難にしているだけでなく、常磐津節の普及や継承に影響を与えている可能性も否定できない。

ところで、こうした状況への危機感はずでに明治末期からあり、東京音楽学校内に設立された邦楽調査掛（明治40³⁾ - 昭和18年?）では、五線譜を用いた常磐津節採譜事業が行なわれていた。そこで本研究では、邦楽調査掛による常磐津節の五線譜採譜の経緯、目的、方法を東京芸術大学附属図書館所蔵資料等から明らかにし、常磐津節の五線譜化の意義と課題について考える足掛かりとしたい。

1. (2) 本研究の基本資料と手法

主な邦楽調査掛の関連資料は、現在は東京音楽学校から東京芸術大学附属図書館が引き継ぎ、所蔵している。本論文では『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻、第二巻、および『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻一人名索引一』（財団法人芸術研究振興財団／東京芸術大学百年史編集委員会・編、音楽之友社、1987-2003年）を中心に、邦楽調査掛の日誌（『日誌B』と名付け

られている)、邦楽調査掛が作成した五線譜を基本資料として用い、これらの資料を常磐津節五線化事業の観点から考察する。まず「2. 関連する先行研究」を整理したのち、「3. 邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の実態」で邦楽調査掛の当初の体制・計画と、実際に行われた常磐津節調査の概要をつかみ、常磐津節五線譜化事業の特徴や抱えていた課題についてまとめる。「4. 五線譜化作業と現存五線譜の関連性」では東京芸術大学附属図書館所蔵の邦楽調査掛による五線譜を、前項までに整理した五線譜化事業の流れと照合し、具体的な五線譜化の工程とその成果について考察する。最後に「まとめ」として、邦楽調査掛の常磐津節五線譜化事業を通して、常磐津節の五線譜化の意義と課題についてまとめる。

2. 関連する先行研究

本論文で注目する邦楽調査掛による五線譜化事業は、日本の伝統音楽すなわち雅楽、平家、能楽、河東節、一中節、常磐津節、富本節、清元節、長唄（長唄／めりやす／劇場用合方）、箏曲の各種目にわたって行われた。邦楽調査掛による採譜に関する先行研究としては、雅楽を扱った寺内直子氏の研究が充実しており、「東京音楽学校邦楽調査掛『雅楽記譜法扣』」（『日本文化論年報』3、1-19頁、神戸大学国際文化学部日本文化論講座、2000年）、「邦楽調査掛における雅楽採譜作業の経緯」（『日本文化論年報』4、18-40頁、前掲日本文化論講座、2001年）、「20世紀における雅楽のテンポとフレージングの変容：ガイスバーグ録音と邦楽調査掛の五線譜」（『国際文化学研究 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』17、85-111頁、同大学院国際文化研究科、2002年）、「近代日本における伝統音楽の再認識～雅楽の五線譜化をめぐる～」（『平成12-14年度科学研究費補助金（基盤研究（c））研究成果報告書』、2003年）がある。ほかに、邦楽調査掛による平曲⁴⁾の五線譜化に係る研究として薦田治子氏の「邦楽調査掛平曲五線譜の成立をめぐる」（『東洋音楽研究』47号、21-48頁、東洋音楽学会、1982年）、長唄を扱った研究に大久保真利子氏の「邦楽調査掛による長唄の五線譜化―事業の実態と再評価―」（『日本伝統音楽研究第9号』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、5-19頁、2012年）などがある。また、五線譜化に限らない邦楽調査掛に関する研究として塚原康子氏の「邦楽調査掛関係資料の調査について」（大角欣也ほか『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成17～19年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、76-110頁、2008年）がある。

本論文ではこれらの先行研究を踏まえ、邦楽調査掛による常磐津節の五線譜化に特化して考察を進める。

3. 邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の実態

3. (1) 邦楽調査掛の初期体制

邦楽調査掛は、明治40年10月、文部省によって東京音楽学校内に設置された。数年来の懸案であった邦楽調査掛の設置が実現したのは、^{たてやまぜんのしん}館山漸之進⁵⁾の働き掛けによるところが大きかったという。館山は皇室、東京音楽学校をはじめ、文部大臣へもたびたび平家の保存を嘆願していたことが知られており⁶⁾、その願いが叶う形で邦楽調査掛は発足した。

邦楽調査掛の目的は、規程によれば「専ラ邦楽ノ調査及保存を為ス」ことであり、事業の柱は①楽曲の五線譜採譜と蓄音機吹き込みによる保存、②公開演奏会、の2つであった⁷⁾。この基本方針は組織内でたびたび確認され、その後の変遷はあったが昭和18年4月以降、邦楽調査掛の存廃が確認できなくなるまで、五線譜採譜は調査保存の基盤として踏襲された。

邦楽調査掛の設置は、規程の定められた時期とするならば明治40年10月25日であるが、実際にはすでに同年10月1日から五線譜採譜が事業の先鞭を切って開始された。さらに先立つ同年9月17日には、調査嘱託が東京音楽学会校長室に招集され、嘱託の辞令書が交付されている。招集された調査嘱託を含めた邦楽調査掛員は、『邦楽調査掛関係書類 上』によれば以下の通りであった⁸⁾。

邦楽調査掛員

主事	東京音楽学校教授	富尾木知佳
調査員	東京音楽学校教授	幸田 延
調査員	東京音楽学校教授	島崎赤太郎
調査員	東京音楽学校教授	今井新太郎
嘱託員	平曲	館山漸之進
嘱託員	芸名 菅野 序遊 一中節	菅野藤次郎
嘱託員	芸名 菅野 吟平 一中節	西山 亀助
嘱託員	芸名 名見崎得寿斎 富本節	吉野萬太郎
嘱託員	芸名 清元延寿太夫 清元節	岡村 庄吉
嘱託員		永井 素岳
嘱託員	芸名 都 一中 一中節	伊藤榊太郎
嘱託員	芸名 杵屋勘五郎 長唄	石原 廣吉
調査補助	東京音楽学校卒業生	檜田倉之介
調査補助	東京音楽学校卒業生	三宅 延齡
書記	東京音楽学校卒業生	赤川寅太郎
雇		早川 與甫

上記のうち、館山は平曲の演奏者であり研究者である（本論文52頁および注5）、6）参照）。それ以外のメンバーを見てみると、まず主事の富尾木知佳（1874-1917年）は帝国大学哲学科で学んだのち東京音楽学校の教授となった。主著に『西洋音楽史綱』（1916年）があり、古代から19世紀におよぶ西洋音楽史を編んだ著作である。続く幸田延（1870-1946年）は幸田露伴の妹にあたり、ヴァイオリンおよびピアノ奏者で、アメリカとオーストリアへ留学した後に東京音楽学校教授となって滝廉太郎、本居長世、三浦環らを育てた音楽教育者でもある。島崎赤太郎（1874-1933年）はオルガン奏者で、ドイツに留学の際にはオルガンと音楽理論を学んだ。帰国後はオルガン演奏のみならず作曲家としても活動し、東京音楽学校教授としてオルガンや音楽理論の教育普及に尽力した。今井新太郎については未詳である。ここまでの主事および調査員はいずれも東京音楽学校教授で、未詳の今井以外はいわゆる西洋音楽の演奏および教育の最前線で活躍した者たちである。

しかしながら邦楽調査掛は日本の伝統音楽を扱うので、嘱託員として伝統音楽の演奏者が集められた。まず菅野藤次郎（4世菅野序遊）は一中節の名手と評される人物である。一中節からは他にも嘱託員が招集された。藤次郎と同じ一中節菅野派の西山亀助（菅野吟平、未詳）と一中節都派の家元である伊藤榎太郎こと10世都一中である。同じ種目から複数の嘱託員を招集しているのは一中節だけで、調査対象として一中節が重要な位置を占めていたことがわかる。ほかに、吉野萬太郎（3世名見崎得寿斎、前名は7世名見崎徳治）は富本節の三味線方であり、当時清元節の隆盛に押されて衰退していた富本節の再興に努めた。岡村庄吉（5世清元延寿太夫）は清元節の家元で、清元節特有の声の技法を存分に発揮する美声であったことで知られる。石原廣吉こと五世杵屋勘五郎は長唄三味線方の名人で、兄である13代目杵屋六左衛門とともに歌舞伎の舞台で活躍し、また作曲にも長けていた⁹⁾。こうしてみると、錚々たる演奏者の面々が嘱託員として名を連ねていることに改めて気付かされる。一方で、この当初の嘱託員の中に常磐津節の奏者が含まれていない点も心に留め置く必要がある。ともかくこうして邦楽調査掛は発足し、「邦楽の調査および保存のための五線譜採譜」が始まった。

3. (2) 常磐津節の調査曲目

前述のように、当初の嘱託員に常磐津節奏者は招集されなかったが、常磐津節を調査対象とする予定はすでにあった。前掲嘱託員の招集に先立つ明治40年9月13日には、主事の富尾から東洋音楽学校長の湯原元一^{もといち}に宛てて、以下を調査科目として報告している¹⁰⁾。（「／」は改行を示し、漢字は新字体に改めた。下線は筆者による）。

調査科目

本年度着手ノ分

平家／長唄／富本／一中／河東（未着手）／清元／尺八（未着手）

来年度以降着手ノ分

蘭八／幸若／義太夫節／常磐津／新内／歌沢／能楽 附狂言／囃子／踊り／舞／俗謡

この調査科目（対象）を当初の嘱託員と照合すれば、「本年度着手」とある種目のうち、嘱託員が対応していない種目（河東節と尺八）が「未着手」になっていることは一目瞭然である。その意味では、常磐津節はもともと「来年度以降」の部類に入っているもので、嘱託員の種目が対応していなくても納得がいく。しかし、「本年度着手」としながら未着手となっている河東節と尺八の演奏者が嘱託員として招集されなかった理由は不明でわからないが、前掲同日の邦楽調査報告に、以下のような委嘱に関する記述がある¹¹⁾。

一 本掛主事及調査員ハ教授ニ命シ嘱託員ハ邦楽各派ノ家元若クハ第一流ノ芸術家ニ就キ詮議ノ上調査ヲ委嘱セラレタリ

尺八については、二大流派として琴古流と都山流がある。琴古流の代々の宗家は黒沢琴古を名乗っていたが、4世が安政7年に没した後は継ぐ者がいなかった。都山流は、明治29年に初世中尾都山が

大阪で創始した流派で、明治44年から大正元年にかけて流派の組織化を遂行した。邦楽調査掛発足時はまさに組織固めをしている時期であった。そうした尺八界の状況もあって、嘱託員の任命に至らなかったのかもしれない。また、河東節は初世十寸見河東^{ますみ}が享保2年に始めた江戸の浄瑠璃で、家元の十寸見河東は11世まで存続した¹²⁾。「11世十寸見河東」は送り名で、山彦秀扇（1814-1919年）の没後に追贈されたので、邦楽調査掛発足時、家元名である十寸見河東を名乗る者はいなかったことになる。家元名を憚って嘱託員を見送った可能性はあるかもしれない。

一方、明治41年度以降の対象として挙げられた常磐津節の調査は、実際には予定より一年遅れて明治42年度から着手されている。その調査（再調査含む）曲目と概要を、「明治四十年～大正二年度『調査済外題目録』」、「大正三年度『大正三年何予定表』」（再調査の予定）、「大正五年度」、「大正六年度『邦楽調査事功報告』」、「大正七年度『邦楽調査事〔功〕報告』」、「大正八年度『邦楽調査事功報告』」、「昭和二年度『常磐津節調査成績報告書』」、「邦楽調査掛議事録」から整理して時系列で書き出し、同じ曲に同じアルファベットを付すと以下の【表1】のように整理できる¹³⁾。

表1 常磐津節調査曲目と概要

整理記号	曲名（ ）とルビは筆者）	年度	備考
A-1	子宝三番叟 絃、哥	明治 42	調査報告
A-2	子宝三番叟 絃、哥	明治 43	調査報告
B-1	つもるこいゆきのせきのと 積恋雪関扉 絃、哥	明治 42	調査報告
B-2	積恋雪関扉 絃、哥	明治 43	調査報告
C-1	しのびよるこうにことよせ 忍夜孝事寄（忍夜恋曲者）絃、哥	明治 43	調査報告
D	いもせどりすがたのまさゆめ 鴛鴦容姿正夢 絃、哥	明治 43	調査報告
E	老松 前弾 絃	明治 43	調査報告
F-1	四天王大江山入 絃、哥	明治 44	調査報告
G-1	もどりかざいろにあいかた 戻鴛色相肩 絃、哥	明治 45	調査報告
H-1	伝授の雲龍 絃、哥	大正 1	調査報告
H-2	伝授の雲龍 絃、哥	大正 2	調査報告
G-2	戻鴛色相肩	大正 3	再調査予定
H-3	伝授の雲龍	大正 3	再調査予定
G-3	戻鴛色相肩	大正 3	再調査報告
I-1	こいとちゅうしゃはつねのたび 恋中車初音の旅	大正 6	3 月、担当：前田
I-2	千本桜道行（恋中車初音の旅）	大正 6	大正 6 年度下半期（7 月より 12 月末日まで）再調査予定
F-2	四天王大江山入	大正 6	大正 6 年度上半期（1 月より 6 月末日）再調査予定（大正 5 の後半より継続）
F-3	四天王大江山入	大正 6	再調査（大正 6 年 4 月から 12 月）、担当：前田
C-2	忍夜恋曲者（忍夜孝事寄）	大正 6	再調査中、担当：前田
C-3	忍夜孝事寄（忍夜恋曲者）	大正 7	再調査報告（大正 7.1 よりおよそ 3 分の 2 調査済み）、担当：前田
C-4	忍夜孝事寄（忍夜恋曲者）	大正 8	調査継続中、担当：前田

表1のように、1つの曲を再調査する例もあったが、曲数としてはA《子宝三番叟》、B《積恋雪関の扉》、C《忍夜恋曲者》(《忍夜孝事寄》)、D《鴛鴦容姿正夢》、E《老松》(前弾のみ)、F《四天王大江山入》、G《戻駕色相肩》、H《伝授の雲龍》、I《恋中車初音の旅》の9曲に集約される。

これらの調査対象曲は、具体的にどのような経過をたどって五線譜化されていったのであろうか。次項で『日誌B』と名付けられた調査日誌(東京芸術大学附属図書館所蔵)により、五線譜化事業の実態を整理する。

3. (3) 五線譜化事業の実態

『日誌B』は、明治40年から昭和3年に至る日々の採譜の内容を午前・午後に分けて記した日誌で、1年ごとに綴じてあり、全22冊から成る(【図1】)。『日誌B』を調査したところ、常磐津節五線譜化に関する記述が326件確認された。それらを整理したものが【表2】(本論文末尾、69-73頁)である。以下、『日誌B』により、邦楽調査掛による常磐津節五線譜化事業の実態を追ってみる。

五線譜化に関わった常磐津節演奏者

常磐津節の五線譜化に際しては、他ジャンル同様、実際の演奏者が嘱託員等の立場で関わっていた。邦楽調査掛設立当時には常磐津節の嘱託員はいなかったが、設立翌年の明治41年には常磐津節の調査が予定されていた。これにともなって常磐津節演奏者が嘱託員として加わった。常磐津節演奏者の嘱託員とその期間は、『百年史 音楽学校篇』第二巻¹⁴⁾によれば【表3】の3名である。

「常磐津文字太夫」は常磐津節の家元名である。常磐津節の五線譜化開始に合わせて6代目文字太夫が、さらにその後を引き継いで7代目文字太夫が嘱託員になったことは、先の邦楽調査報告に「邦楽各派ノ家元若クハ第一流ノ芸術家」を招集するという記述に照らしても理解できる(本論文54頁)。

常磐津豊蔵は、本名未詳で演奏者としてのプロフィールもあまり詳しくわかっていない。はじめ岸沢巳都次郎を名乗っていたが、常磐津派・岸澤派の再分裂にともない家元派に移って常磐津豊蔵と改名した。この改名に際し、明治41年に6代目文字太夫と三世駒太夫の補助を得て改名披露を行ったというから、6代目文字太夫との関係は深い。その後、大正8-9年の間に岸沢豊蔵を名乗るも、その後は再び常磐津豊蔵に改名して大正12年まで演奏活動をしていたという¹⁵⁾。この背景を重ねると、常磐津豊蔵が明治42年に6代目文字太夫の「代理」として邦楽調査掛に関わっていたことは興味深い(【表2】No.19、20)。なお、常磐津節五線譜化事業に直接携わった

図1 『日誌B』 明治42年4月27日
(午後の欄に常磐津節五線譜化の記述初出)

日 曜 大 日 七 十 二 月 四 年 二 十 四 治 明				
考 備	詞	歌	流 名	嘱 託 員
		うしろ かみ ま	清 え	午前 一 松 本
			外 題	記 録 者
			松 の 音	
考 備	詞	歌	流 名	嘱 託 員
		お お い	常 磐 津	午後 二 松 本
			外 題	記 録 者
			子 宝 三 番 叟	

(東京芸術大学附属図書館所蔵)

のは6代目文字太夫¹⁶⁾と豊蔵（ただし前述の2回のみ）に絞られる（常磐津節の五線譜化に関するかぎり、『日誌B』に7代目文字太夫の名は見あたらない）。

表3 常磐津節演奏者の嘱託員

芸名（氏名）	専門（担当）	期間
6代目常磐津文字太夫 （常岡丑五郎）	常磐津節	調査嘱託：明治42.4.27～大正5年度 嘱託員：大正6年度～昭和4.10.21 昭和2
常磐津豊蔵（未詳）	常磐津節	明治42
7代目常磐津文字太夫 （常岡鑛之助）	常磐津節	嘱託員：昭和3.11.22～昭和16年度

五線譜化に関わった採譜者

実際に採譜を行なったのは、【表2】の記譜者欄の押印や備考欄を見ると、最も多く関わったのが前田（前田久八）、ほかに三宅（三宅^{のぶとし}延齡）と本居（本居長世）であった。それぞれの在職期間等は『百年史 音楽学校篇』第二巻¹⁷⁾によれば以下の【表4】の通りである。

表4 常磐津節採譜に関わった採譜者

氏名	期間	備考
三宅延齡	調査補助：明治41年度～明治44年7月10日 調査嘱託：明治44年7月10日～大正5年度 嘱託員：大正6年度～大正11年度	初出勤は明治40年9月17日
本居長世	調査補助：明治41年4月10日～明治42年度 調査員（助教授）：明治43年度～大正5年12月27日（退任）	
前田久八	調査員（助教授）：明治42年度～大正9年度 嘱託員：大正10年度～昭和12年度（大正12年11月1日解任）	

上記3名のうち、三宅延齡は東京音楽学校卒業生で、邦楽調査掛発足当時から調査補助として関わっていたが、詳細はわからない。年代的には野口雨情作詞「野の鳥」、海野厚作詞「ひなまつり」、葛原しげる作詞「夕日」などを作曲した人物と思われる。また小沢優子「明治40年代の名古屋の洋楽受容－『名古屋新聞』の奏楽記事を中心に－」（『愛知県立芸術大学紀要』No.42（2012）、133-144頁）には、明治42年1月30日の「伊岡震災救済金募集音楽会」（御園座、明治42年1月28日、29日、30日、2月1日）にチェロ演奏者として出演した記録が引用されている。なお、ピアノ演奏で本居長世も同公演に出演しており、両者のつながりを示している。

本居長世（1885-1945年）は明治41年に東京音楽学校を卒業後、邦楽調査掛に調査員補助として加わり、のちに東京音楽学校助教授になった作曲家である。日本の伝統音楽と西洋音楽の調和を目指した本居は、吉田晴風や箏の宮城道雄とともに日本音楽界に新風を巻き起こし、その動きが「新日本音楽運動」と名付けられたことは周知の通りである。また、大学の同期生であった山田耕筰や中山晋平らとともに童謡運動に加わり、『十五夜お月さん』、『七つの子』、『赤い靴』など、多くの作品を作曲

した。本居が邦楽調査掛の五線譜採譜において重要な役割を担っていたことは、『百年史 音楽学校篇』第二巻に「本居氏を楽曲の調査研究の統一および各種取り扱い上の主査となす」とあることからわかる¹⁸⁾。

常磐津節の採譜に最も多く関わった前田久八（1874-?年）は、明治28年に東京音楽学校を卒業後に助教授となり、明治42年から邦楽調査掛調査員として加わった作曲家で、明治43年に『洋楽手引』を記したことでも知られる。

このように、常磐津節家元と東京音楽学校出身の日本音楽にも西洋音楽にも知見のある作曲家の協力体制の下で、実質的な常磐津節五線譜化が進められた。

五線譜化事業の経過

先述のように、常磐津節の五線譜化に関する『日誌B』の記述は、明治42年4月から昭和3年1月の足掛け19年にわたって、326件確認される。五線譜化の作業は、多くが採譜者と演奏者の2人体制を行われ、一通りの採譜が終わったあとの再調査には採譜者が2名（その場合、「楽曲の調査研究の統一および各種取り扱い上の主査」であった本居が加わることが多い）になることもあった。スケジュールについては、常磐津節の五線譜化作業は、休日や夏季・冬季など（東京音楽学校が休みの日）をのぞいて、ほぼ毎週火曜日の午後に設定され、計画的に実施されることになっていた。しかし実際には、計画通りとはいかなかったようである。【表2】を年代を追って見てみる。

まず、明治42年から明治44年までは、五線譜化作業が集中的かつ比較的計画どおりに行われており、いわば「順調期」と言える。五線譜化する曲目は《子宝三番叟》→《積恋雪関扉》（「関の扉」）→《積恋雪関扉 下》（「関の扉 下」）→《忍夜恋曲者》（《忍夜孝事寄》^{しのびよるこうにことよせ}、「将門」）→《子宝三番叟》→（《積恋雪関扉》を1日挟んで）《忍夜恋曲者》→《鴛鴦容姿の正夢》（「鴛鴦」）→《積恋雪関扉》→《四天王大江山入》（「古山姥」）と進んでおり、1つの曲をある程度まとめて五線譜化してから別の曲、というように進みつつ、少し間を置いてから一度五線譜化したものに再び戻って検証しようとしていた流れが見て取れる。また曲目も、《四天王大江山入》こそ現在では同題材の《薪荷雪間たきぎわうゆきまの市川》（「新山姥」）の方が上演機会が多いものの、いずれも常磐津節を代表する現行曲である。しかも祝儀曲、時代物、舞踊曲など多様な曲調の曲が取り上げられていて、五線譜化が常磐津節の特徴を表す代表曲を書き留めようとしたねらいは明白である。

しかし明治45年に入ると、五線譜化は欠勤によってペースが乱れるようになる。明治44年春頃から目立ちはじめていた欠勤による五線譜化中断が、明治45年4月から大正元年7月17日には3ヶ月間にわたる長期停止となった。それ以降、作業はたびたび中断し、さらにその中断が長引くようになっていく。実際、大正4年以降はほとんどが計画のみで五線譜化作業は実施されず、そのたびに採譜者（多くの場合は前田久八）は出勤するものの、文字太夫の欠勤により中止となることが常態化していった。この中止が常態化するまでの明治45年から大正3年は、「停滞期」と言えよう。この時期に五線譜化された曲目の変遷を見ると、《戻駕色相肩》（「戻駕」）→《伝授の雲龍》→《蜘蛛絲梓弦》（「蜘蛛の糸」）^{くものいとあずさのゆみはり}→《心中浮名の鯨鞘》（「お妻八郎兵衛」）→（《戻駕籠色相肩》を2日、^{もみじがさいとのにしきぎ}《紅葉傘糸錦色木》（「善知鳥」）^{うとう}）を1日挟んで《伝授の雲龍》（間に《積恋雪関扉 下》を1日挟

む)、となっている。順調期のように、1曲をある程度まとめて五線譜化する作業と、少し間を置いてから五線譜化したものに再び戻る作業を並行しようとしているものの、しばしば作業が中断するために効率は悪い。取り上げる曲目も、《蜘蛛糸梓弦》のような大作にも取り組むが、《戻駕籠色相肩》、《伝授の雲龍》など比較的小規模な曲が取り上げられ、《紅葉傘糸錦色木》については1日手掛けたところで中断し、《伝授の雲龍》に曲目を変更している。《積恋雪閑扉 下》は大曲だが、この時期に1日取り掛かったものの、大正4年1月26日（【表2】No.215）に再び取り上げたのちは再開されることなく、そのまま五線譜化事業自体の終了を迎えることになった。もっとも、この時期に取り上げられた曲目には、常磐津節の母体である豊後節より伝わる最古の曲とも言われる《伝授の雲龍》や《心中浮名の鯨鞘》のように、今日では演奏機会のきわめて少ない曲が含まれている。当時の伝承を保存、記録するという意味では、貴重な作品を取り上げた試みである側面を無視することはできない。

続く大正4年から大正15年にかけては、ほとんど五線譜化が進まなかった「中断期」と言える。理由については後に考察するが（60-61頁）、実際、大正4年には8日、大正5年には5日、大正6年には1日しか実施されず、大正7年から大正15年の作業記録は、『日誌B』には見受けられない。もっとも、【表1】を見れば、I、F-2、F-3、C-2、C-3、C-2の6件の各種報告があり、『日誌B』には記されていない五線譜化作業が行われていた可能性があり、注意が必要である。いずれにしても、この時期には2度の転換点があったと考える。

最初は大正4年10月26日（【表2】No.244）である。この日も通例通り、午後に常磐津節の五線譜化作業が予定されていたものの、欠勤により中止されたが、「記譜三宅氏 臨時調査シタリ」として長唄の嘱託員・坂田（2代目今藤長三郎）氏とともに臨時調査を開始している。これまで、常磐津節の五線譜化作業がたびたび中止になっても、他の作業をその時間枠に入れたことはこれ以前に確認できず、この日の対応は異例と言える。

第2の転換点は、大正6年10月30日（【表2】No.317）である。この1週間前の10月23日（【表2】No.316）には、通例通り午後から常磐津節の五線譜化が予定されていたが、「常磐津節調査ハ常岡丑五郎氏欠勤ニテ休ミ」となっている。この年の最初の五線譜化が行われた3月13日以来、10月23日で7ヶ月にわたる中断となった。すると次週の10月30日(火)は、これまでであれば午後に常磐津節の五線譜化作業が行われるところだが、「北村細谷弘田前田兼常諸氏出席囃子鳴物ノツキ調査シタリ」とあって、囃子の調査に切り替えられている。そしてこれ以降、昭和2年6月15日（【表2】No.318）まで、実際に常磐津節の五線譜化が行われた記録は、『日誌B』では確認できない。したがってこの時点で、邦楽調査掛が常磐津節五線譜事業について何らかの方向転換の判断をしたと考えるのが自然であろう。以上の2度の転換点を経て、常磐津節五線譜化は中断期に入ったのである。

ちなみに、わずかながらこの時期に五線譜化された曲目の変遷は、先述の停滞期の最後から引き続いて《積恋雪閑扉 下》を1日のみ取り上げたのち、順調期に一度取り上げていた《四天王大江山入》→《恋中車初音の旅》となっている。もっとも、ここに【表1】の報告書の情報を重ねると、大正6年から大正8年の間に《忍夜恋曲者》も再調査を行っていたと見られることに注意が必要である（【表1】C-2、C-3、C-4）。

その後、中断していた常磐津節五線譜化が再開されたのは昭和2年6月15日（【表2】No.318）で、

同年7月1日（【表2】No.324）までの2週間ほどの間に8回の五線譜化作業が行われた。それも全てが再調査および浄写という最終工程に集中的に充てられており、これまでの五線譜化事業の「集約期」と言える。この間、毎週2回、午前または午後の半日を費やし、それぞれ1曲ずつを取り上げて浄写すなわち仕上げに漕ぎつけようとしている。浄写まで終了した曲は《鴛鴦容姿の正夢》、《老松前弾》、《恋中車初音の旅》、《蜘蛛絲梓弦》、《御代の秋》、《伝授の雲龍》、《心中浮名の鮫鞘》である。ただし《御代の秋》については、大正4年に東京音楽学校奉祝歌として発表された曲なので、他の常磐津節伝承曲の五線譜化と同列に扱うことはできないと考える。ほかの6曲については、それまでの五線譜化作業の集大成であったと思われるが、当該部分には採譜者や嘱託員の名前がないので、どのような体制で集約が行われたのかは詳細が不明である。翌昭和3年1月12日、「調査成績書ヲ作成シ報告ス」として、明治42年から26年にわたった邦楽調査掛による常磐津節五線譜化事業は終了となった。

このように常磐津節の五線譜化は26年間に及んだが、事業の経過を詳細に追うと、順調期→停滞期→中断期を経て、最後はわずか2週間の集約期をもって終了したという流れが見えてくる。次項で、五線譜化が停滞ないし中断した理由について、もう少し詳しく見ておきたい。

五線譜化作業が実施されなかった理由

【表2】でグレーの網掛けの部分には、採譜が予定されながら実施されなかったという記述がある。これが実に157件にのぼる。つまり計画された日程（326日（件））の半分近くは、実際には作業が行われなかったことになる。ほかにも、【表2】のNo.317と318の間、大正7～15年の日誌には常磐津節採譜の記録がない（ただし先述の通り、報告書には6件の五線譜化の記述がある）。

『日誌B』には、五線譜化を予定しながら休みとなった際には、その事情も記録されている。予定されながら五線譜化作業が行われなかった157件の理由を見てみると、最も多いのが常岡氏すなわち6代目文字太夫の欠勤による136件である（もっとも、136件のうち4件では採譜者も欠勤であった）。また、No.19、20では2週にわたって先述の常磐津豊蔵が6代目文字太夫の代理として出勤している。また、6代目文字太夫は出勤したものの採譜者（多くの場合は前田久八）が欠勤して作業ができなかったのは3件、国や学校行事等で中止になったのが16件、原因未詳（詳細が書かれていないが出勤者の押印がなく、作業内容が空欄なので中止になったと思われる）が2件確認できた。欠勤の理由までは書かれていないことが多いが、No.149（「常岡丑五郎氏病氣欠勤ニ付休ミ」）、256（「常岡氏病氣欠席」）、291（「常磐津文字太夫病氣欠勤 前田氏病氣欠勤」）については病気による欠勤であることがわかっている（それ以外の欠勤理由は不明）。他のジャンル、例えば清元節でも嘱託員である演奏者が欠勤のため、五線譜化が行われなかった例は目立つが、概観した限りでは常磐津節ほど多くはない。文字太夫が明治45年以降、実際にはほとんど常磐津節の五線譜化に関わっておらず、結果としてそのことが常磐津節の五線譜化の停滞および中断に繋がった可能性は、理由が何であれ、否めないだろう。もっとも、この停滞が文字太夫の健康状態によるものなのか、演奏者ゆえの舞台公演（歌舞伎や日本舞踊、常磐津節演奏会など）で多忙であったことによるのか、別の要因があったのかなどの要因は判然としないし、この停滞状態を邦楽調査掛が打開することができなかったことも、また事実で

ある（ジャンルによっては、演奏者宅を採譜者が訪問して調査した例もあったが、常磐津節に関してはそうした例は見あたらない）。

このように、実際の計画どおり定期的な五線譜化とは遠い状況にあったが、それでも最初の3年間に集中的に五線譜化が行われ、最終的には以下のような状況が報告されて終了した。『百年史 音楽学校篇』第二巻（618-619頁）にも昭和3年3月20日の「常磐津節調査成績報告書」¹⁹⁾がその報告であり、この提出が【表2】のNo.326にあたる。「常磐津節調査成績報告書」の内容を整理すると以下のようなになる。

・調査が終了し、浄写の上、報告した曲

《子宝三番叟》《積恋雪関扉》《戻駕色相肩》《伝授の雲龍》（「これぞといふすぐれし画師もなきよしきけば」まで）《四天王大江山入 上》《御代の秋》²⁰⁾

・浄写終了していたが未報告の曲

《四天王大江山入 下》

・昭和2年度になって原稿から浄写したが未報告の曲

《鴛鴦容姿正夢》（ママ）《老松前弾》《蜘蛛絲梓弦》《心中浮名の鮫鞘》《伝授の雲龍》（「みづから女なりとも」より「いろね慕うて来りけり」まで）

・未完の曲

《紅葉傘絲錦色木》

次の「4. 五線譜化作業と現存五線譜の関連性」では、曲別に採譜工程とその成果として東京芸術大学附属図書館が所蔵する現存五線譜に着目する。

4. 五線譜化作業と現存五線譜の関連性

東京芸術大学附属図書館には、邦楽調査掛によって採譜された常磐津節の五線譜が所蔵されている。この所蔵情報を【表1】・【表2】と照合したのが【表5】である（ただし、前述の《御代の秋》は曲の性格および五線譜化の目的が異なるとみなし、省いた）。備考欄に記したように、【表2】の『日誌B』の作業記録と五線譜の整合性が不明なものも散見される。以下、曲ごとに邦楽調査掛の報告書等の記述（【表1】）、『日誌B』（【表2】）、現存五線譜の整合性について整理する。随時、【表5】および必要に応じて【表1】・【表2】を参照されたい。

《子宝三番叟》

《子宝三番叟》は、「常磐津節調査成績報告書」で「調査が終了し、浄写の上、報告した曲」として報告されている。この曲の五線譜化については、明治42・43年度の調査報告に記載されており（【表1】A-1、A-2）、『日誌B』の明治42年度（【表2】No.1～5）、明治42年度（【表2】No.30～37）に該当する記述があるので、整合性が取れている。一方で現存する五線譜は【表5】のように①～④の

4種があり、大正5年採譜と記された④については、調査報告にも『日誌B』にも該当する記述がなく、五線譜化の作業と五線譜の関連はいささか不明瞭である。幸い《子宝三番叟》は、邦楽調査掛が採譜した五線譜としては、1曲について4種と、最も多くの五線譜が残されているので、本項最後に改めて五線譜自体を比較して、五線譜化の経緯をたどることにする。

《積恋雪関扉》

《積恋雪関扉》は、「常磐津節調査成績報告書」で「調査が終了し、浄写の上、報告した曲」として報告されている。また、調査報告には明治42・43年度の記載がある（【表1】B-1、B-2）。これは『日誌B』の明治42年度（【表2】No.6～9、11～21）、明治43年度（【表2】No.53・54、56～67）と対応している²¹⁾。一方で、五線譜は【表5】の当該曲①の1種類しか確認できておらず、この楽譜には三味線パートしか採譜されていない。その上、『日誌B』によれば、明治42年12月14日（【表2】No.22）に《積恋雪関扉 下》（下線は筆者による。以下、本項では同様）の五線譜化作業に取り掛かっており、その続きの作業は大正3年12月1日（【表2】No.209）と翌大正4年1月26日（【表2】No.215）にも行われている（それ以降は中断したままになった）。これは《積恋雪関扉》の浄瑠璃パートは採譜しないまま「下」の採譜に移行したということなのであろうか。いずれにせよ、常磐津節の代表曲である《積恋雪関扉》は、調査報告にも『日誌B』にも浄写に至ったという記述はなく、現存の五線譜も完成を見ていないので、作業は途中で終わった可能性がある。もっとも「常磐津節調査成績報告書」では、先述のように「調査が終了し、浄写の上、報告した曲」として《積恋雪関扉》が挙げられていることもあり、今後さらなる検証が必要である。

《忍夜恋曲者》

《忍夜恋曲者》（《忍夜孝事寄》とも）は常磐津節では最もよく知られた曲の1つで、今日でも頻繁に演奏される。

調査報告には、明治43年度（【表1】C-1）があるほか、大正6～8年度に「再調査の予定」、「再調査報告（ただし途中まで）」、「調査継続中」の記述があり（【表1】C-2、C-3、C-4）、再調査の途中で事業終了を迎えたことがわかる。『日誌B』の当該箇所を見ると、明治43年度にあたる記述が、明治43年1月18日から翌明治44年3月1日（【表2】No.21～28）にある。五線譜について【表5】の当該曲を見てみると、採譜時期の記されていない2種類があるが、三味線パートのみ採譜した①がまずあって、後に②に進んだが、浄写まで至らなかったと考えるのが妥当であろう。最終的な報告書である「常磐津節調査成績報告書」でも、この曲については触れていない。

《鴛鴦容姿の正夢》

《鴛鴦容姿の正夢》は、「常磐津節調査成績報告書」で「昭和2年度になって原稿から浄写したが未報告の曲」として報告されている。この曲に関する調査報告は明治43年度のみである（【表1】D）。これに対して『日誌B』には明治43年9月13日から同年11月15日の記述（【表2】No.44～52）が対応するほか、調査報告にはないが、昭和2年6月15日の記述（No.318）に「浄写」とある。五線

譜は2種類あり、【表5】の当該曲①には「未定稿」とあるので、明治43年度の調査段階の五線譜がこれにあたり、『日誌B』にある浄写が②であろうと推定される。

《老松 前弾》と《老松》

《老松 前弾》は、「常磐津節調査成績報告書」で「昭和2年度になって原稿から浄写したが未報告の曲」として報告されている。この曲については、「前弾」と明記した調査報告がなく、『日誌B』には昭和2年6月20日にのみ記載がある（【表2】No.320）。ちなみに《老松》については、明治43年度の調査報告（【表1】E）、それに対応する『日誌B』の明治43年12月5日の記述（【表2】No.55）がある。前弾は三味線のための前奏部分であるから、五線譜化は前奏部分に留まり、曲の本体の五線譜化は未完に終わったことになる。

《四天王大江山入》

《四天王大江山入》は、「上」については「常磐津節調査成績報告書」で「調査が終了し、浄写の上、報告した曲」として報告されている。同様に、「下」については「浄写終了していたが未報告の曲」とされている。

この曲に関する調査報告は明治44年度のものがあり（【表1】F-1）、『日誌B』の明治44年5月23日から翌明治45年2月6日の記述に対応する（【表2】No.73～96）。また調査報告では、再調査について、大正6年度の再調査予定として「大正5年の後半より再調査を継続している」旨が（【表1】F-2）、また大正6年度の再調査として「調査中」である旨が報告されている（【表1】F-3）。これに対して『日誌B』を見ると、大正5年後半どころか、すでに大正4年6月8日から大正6年3月13日にかけて、8回にわたる五線譜化作業の記述があり（【表2】No. 234、236、238、240、242、249、276、278。このうちNo. 234、242、249、276には再調査であることが明記されている）、報告よりも早く再調査に取り掛かっていたことになる。

こうした精力的な五線譜化作業に対して、五線譜は2種類現存しているが、【表5】当該曲の①には《四天王大江山入》とあり、②には《四天王大江山入 下》とある。したがって当該曲の五線譜のうち【表5】①が調査報告F-1～3、および『日誌B』No. 234、236、238、240、242、249、276、278の成果であると推定される。また調査報告には記載がないが、『日誌B』昭和2年6月17日（【表2】No.319）に記載されている《四天王大江山入 下》の再調査（最初の調査がいつだったのかは不明）の成果としての五線譜が【表5】の当該曲の②、《四天王大江山入 下》（未定稿）ということであろう。《四天王大江山入》の後半部分の浄写は現在のところ確認できておらず、「常磐津節調査成績報告書」で「浄写は終えているが未報告」とされているところの「浄写」については、さらなる検討の余地がある。

《戻駕色相肩》

《戻駕色相肩》は「常磐津節調査成績報告書」で「調査が終了し、浄写の上、報告した曲」として報告されている。この曲に関する調査報告は、明治45年度（【表1】G-1）に記載があり、『日誌B』

では明治45年2月20日から4月9日にかけて、年度をまたいで6回の作業が記録されている（No.98、99、101、102、103、105）。続けて、調査記録にはないが、『日誌B』によれば大正元年7月17日から同年11月12日まで8回の五線譜化作業が行われた（【表2】No.119～124、126・127）。その後、大正3年度に再調査予定があったが（【表1】G-2）、それに対応する記述として『日誌B』には大正3年6月9・16日にいずれも再調査の記録がある（【表2】No.196、197）。ちなみにここまでの五線譜化の採譜者は『日誌B』に前田久八と記されている。この曲の五線譜は2種残っているが、【表5】の当該曲②の五線譜には主査・本居長世の名前があることから、（それまでの採譜者には『日誌B』に前田久八の名前しかないことと考え合わせても）浄写に該当する五線譜であると言えよう。もっとも、浄写に相当する記事は再調査報告があるものの（【表2】G-3）、『日誌B』には記述が見当たらない。

《伝授の雲龍》

《伝授の雲龍》は、そのルーツが常磐津節のもととなった豊後節にあることから、文字太夫にとって特別な意味を持った曲として五線譜化の対象曲に加えられたと察せられる。五線譜化については、「常磐津節調査成績報告書」では途中まで「調査が終了し、浄写の上、報告した曲」、その続きは「昭和2年度になって原稿から浄写したが未報告の曲」として報告されている。

調査報告では、大正1・2年度に調査済みと記載がある（【表1】G-1）。これに見合う記録として、『日誌B』の大正元年11月26日から大正2年3月11日にかけて8回の作業記録がある（【表2】No.129、131、133～136、138、141）。続いて大正3年度に調査予定とされている（【表1】G-2）記述には、『日誌B』の大正3年6月30日から12月5日にかけて7回の記録（【表5】No.201、202、204、205、207、210、211）が対応している。このほか『日誌B』には昭和2年7月1日（【表5】No.324）の記録（再調査、浄写）もあるが、調査報告には特に記載がない。五線譜としては1種しか残っていないので、これを浄写とみなすことになろう（【表5】当該曲①）。

《恋中車初音の旅》

《恋中車初音の旅》について、調査報告書では、大正6年3月に調査を行なったことが報告され、さらに大正6年度下半期に再調査予定となっている。『日誌B』を見ると、大正6年3月13日の採譜記録はあるが（【表2】No.292）、その後の再調査が実施された記録はなく、昭和2年6月23日に再調査と浄写の記述がある（【表2】No.321）。逆に、調査報告書にはないが、『日誌B』には、大正6年3月に先んじて大正5年11月28日、12月5日、12月19日に3回の五線譜化作業の記録がある（【表2】No.281、283、284）。現存する五線譜は未定稿となっているので（【表5】当該曲①）、最終的な決定稿ではない。一方で再調査を経て浄写されたとされる五線譜は確認できず、疑問が残る。

《蜘蛛絲梓弦》

《蜘蛛絲梓弦》は、「常磐津節調査成績報告書」で「昭和2年度になって原稿から浄写したが未報告の曲」として報告されている。この曲について、調査報告には記述が見当たらない。一方、『日誌B』には大正2年3月11日から9月30日にかけて、連続的に記述が現れる（【表2】No.142、143、

144、145、147、148、150、151、155、156、159～161の13件)。また、これとは別に昭和2年6月29日には再調査と浄写が終了したとの記述もある(【表2】No.322)。一方、五線譜は2種残っており、【表5】当該曲の①は未定稿、②には大正2年3月とある。後者は、大正2年3月18・25日の『日誌B』の記述(【表2】No.142、143)に一致する。しかし五線譜化作業はこの日から始まるところであり、②の五線譜がこの時期のものとなると、①の未定稿は少なくとも浄写以前の五線譜であることから、浄写した五線譜が見当たらないということになる。②の五線譜化には前田久八とともに主査であった本居長世も採譜に立ち会っており、そのことが『日誌B』の大正2年3月18・25日の採譜者ないし備考欄に記されていない点も気になる(両日とも採譜者として前田久八のみが記されている)。現存五線譜の採譜されたタイミングについては、再考の余地があるように思われる。

《心中浮名の鮫鞘》

《心中浮名の鮫鞘》は、「常磐津節調査成績報告書」で「昭和2年度になって原稿から浄写したが未報告の曲」として報告されている。しかし、この曲についても調査報告書には記載がない。ところが『日誌B』には、17回の五線譜化作業(【表2】No.164～166、169～172、174～176、180・181、183、186、188、193・194)と、1回の再調査・浄写(【表2】No.325)の記録がある。また、五線譜は2種類が残っており(【表5】当該曲①、②)、①は未定稿とあり、②には大正2年1月の採譜とある。『日誌B』の関連記事が最初に現れるのは大正2年10月28日で、五線譜の採譜時期とずれがあり、五線譜化作業と五線譜自体との関係がはっきりしない。少なくとも五線譜は①の未定稿を経て②が成立したと考えるのが自然であるが、『日誌B』の記録と時期が一致しないのである。

以上、複数の立場の異なる資料から考察することで見えてきた、採譜の記録と楽譜成立の時期の違いについて、複数の課題が残された。そこで、五線譜が最多の4種残されている《子宝三番叟》を再度取り上げ、五線譜のより詳しい比較を行い、五線譜化作業の流れとの照合を試みる。

《子宝三番叟》再考

再び《子宝三番叟》について考察する。この曲は、邦楽調査掛の五線譜が4種伝わっているのも、まずこれらを比較して成立した順序を検討したい。

この曲の五線譜(【表5】当該曲①～④)の冒頭部分は【図2】①～④(67-68頁)のとおりである。①、②は三味線のパートだけを採譜しており、③、④はそこに浄瑠璃パートを加えた形になっている。このうち④だけはインクを使ってペンで書かれおり、成立も大正5年とわかっているのも、これは浄写であろうと見当がつく。そうすると、浄瑠璃と三味線パートが鉛筆書きされている③は、すでに三味線パートも浄瑠璃パートも最後まで採譜し終えた状態であり、④の下書きともいえるべき五線譜であるのも、④の少し前、おそらく『日誌B』に《子宝三番叟》五線譜化の記録として最後に現れる明治43年5月10日(【表2】No.37)頃にかかれたと推定できる。

問題は①と②の成立順序である。一見したところ、②は1段目のように二重線で消して書き直した跡があったり、3頁目が2段目で終わっていて4頁の冒頭は途中を省略して少し先の部分から書き始めていたりするなど、楽譜に粗さが見られるので、①より先にスケッチのようにして書かれたかのよ

うである（【図3】）。しかし、よく見ると4頁の左上に薄く「4／5」と書かれている点に注意しなければならない。改めて①の冒頭を見直してみると、こちらの左上には「27／4」と書かれている。これらの数字は、採譜作業の行われた月日を示しているのではないだろうか。すなわち、①の「27／4」は、《子宝三番叟》の採譜作業が最初に行われた明治42年4月27日（【表2】No.1）を、同様に②の「4／5」は5月4日、すなわち《子宝三番叟》の2回目の採譜作業が行われた明治42年5月4日（【表2】No.2）を示しているのではないかと考えられる。したがって①から④の五線譜は、①が明治42年4月27日、②が同年5月4日、③が明治43年5月10日頃、④の浄写が大正5年に成立したと推定できる。

ここでもう1つ気づくことがある。五線譜は、①の段階ですでに三味線パートの最後まで五線譜化し終えているのである。②は途中を省略してその先を採譜したりしているが、いずれにせよ最後の部分まで三味線パートを書き終えている。ということは、それ以降の《子宝三番叟》の五線譜化作業は、専ら浄瑠璃パートをすでに採譜した三味線パートとの兼ね合いを見ながら書き加えていくことに費やされたことになるのだ。『日誌B』によれば、《子宝三番叟》の五線譜化が行われたのは、明治42年4月27日、5月4・11・18・25日、翌明治43年3月22・29日、4月5・12・19・26日、5月3・10日の、合計13日である（【表2】No.1～5、30～37）。この13日のうち11日間は浄瑠璃パートの五線譜化に費やされたわけである。「語りもの」の音楽である常磐津節は、同じ三味線音楽でも長唄と異なり、三味線の拍と拍の間を縫うように浄瑠璃が語られ、頻繁に半拍ないし1／4拍、三味線より先に出たり、後から出たりすることがある。むしろ、三味線と浄瑠璃の拍が一致する（くつつく）ことを避ける傾向にある。西洋音楽の専門教育を受けた採譜者にとっては、このような三味線パートと浄瑠璃パートの音の綾を楽譜に書き取ることが、かなり困難な作業であったのではなかろうか。しかも《子宝三番叟》は祝儀曲に分類される曲なので、たとえ歌舞伎を見慣れた人であっても、趣が全く異なると感じる。さらに祝儀曲の中でもいくぶん和らいだ独特な雰囲気を持つ曲なので、常磐津節の典型的な音型から離れた浄瑠璃の節の運びや三味線の手（旋律）の動きが多い。このように《子宝三番叟》は常磐津節の祝儀ものを代表する曲で、最初に五線譜化するのにふさわしい重要な曲ではあるが、同時に「五線譜化作業の最初の曲」としては手強い曲でもあっただろうと推察する。またそうした過程が、4種存在する五線譜や、そこに充てられた日数にも表れているように思う。

5. まとめ

本論文では、邦楽調査掛による常磐津節五線譜化事業の実態を探り、各種資料を用いて整理する中から、常磐津節を五線譜化する意義や課題を見出そうとした。邦楽調査掛のこの事業の目的は「専ら邦楽ノ調査及保存を為ス」ことであつたが、それまで「楽譜を共有する」習慣のなかった常磐津節を、常磐津節演奏者と西洋音楽の専門教育を受けた採譜者との共同作業により五線譜化し、保存しようという計画は、なかなか予定通りは進まなかった。その理由は大きく二つが確認された。

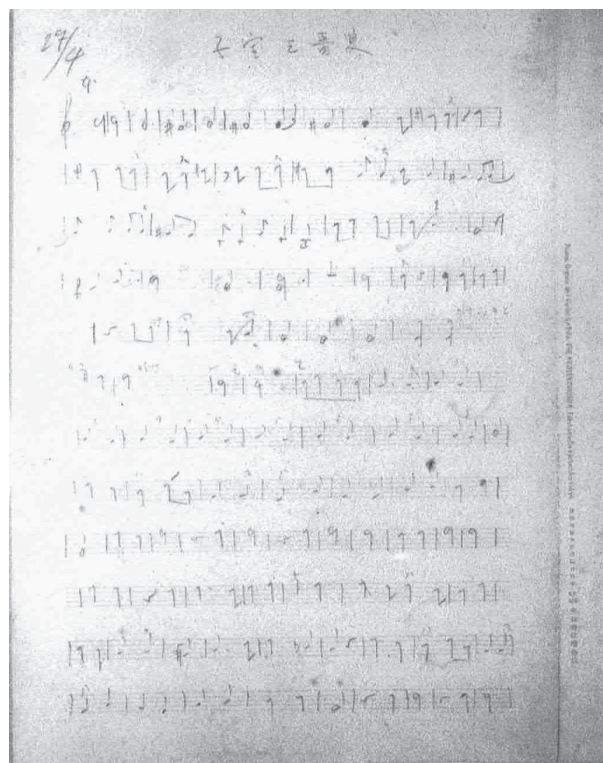
一つには、スケジュール調整の問題である。当初から囑託員として委嘱する演奏者について、「邦楽各派ノ家元若クハ第一流ノ芸術家」に狙いを定めていたことは、保存する音楽の質を担保する意味では当然であった。その一方で、対象となる演奏者は当然演奏を生業とし、流派を統率する立場にも

あるから、多忙を極めたであろう。また、文字太夫の場合には『日記B』に「病欠」であることが複数明記されているので、健康面の心配があったかもしれない。いずれにせよ、少なくとも常磐津節に関しては、毎週決まった曜日の午後に、保存のための五線譜化作業に時間を割くことが難しかった実態が明らかになった。

もう一つには、常磐津節自体に内在する五線譜化の難しさである。邦楽調査掛による五線譜をより詳細に幅広く分析する必要があるが、『子宝三番叟』の五線譜化の作業を追ってみただけでも、三味線パートの採譜をするだけならばそれほど時間がかからないが、そこに浄瑠璃パートを、三味線パートとの兼ね合いを理解しながら追記していくことは、困難を伴う作業であったことが察せられた。おそらく、一度は採譜し終えた三味線パートも、浄瑠璃パートと一緒に捉え直す段階では、書き改めなければならないことが多々あったであろう。本論文では五線譜そのものの音楽分析には至らなかったが、邦楽調査掛による五線譜化の試みを複数の資料から整理してみることで、先人たちが先駆的な常磐津節の五線譜化事業をどのように進めながら、「浄写」すなわち邦楽調査掛にとっての「保存」を目指していったのか、その具体的な過程や課題を知ることができた。今後は、五線譜の音楽的な分析を進めるとともに、採譜の技術にも焦点を当てていきたい。

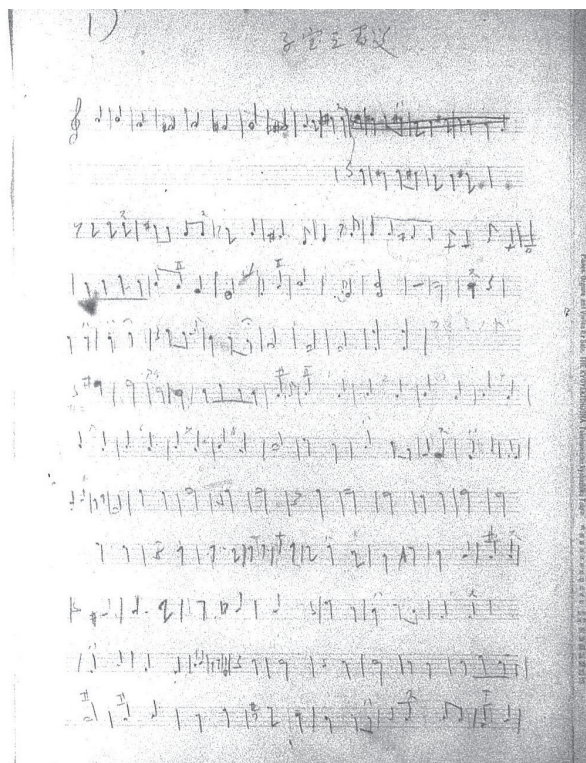
※本論文は2018～2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、18K00158）「常磐津節の音楽分析のための基盤研究」の成果の一部である。

図2 ①邦楽調査掛採譜の五線譜
《子宝三番叟》冒頭



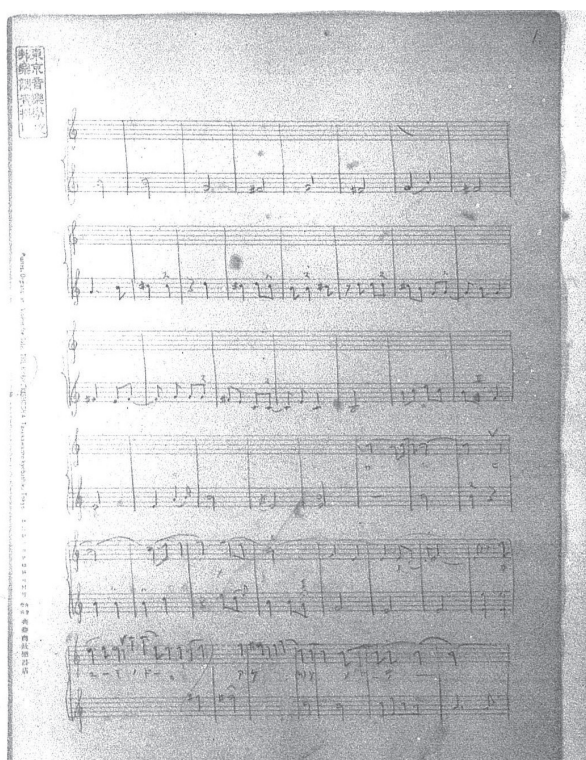
（東京芸術大学附属図書館所蔵
資料名「子宝三番叟 絃：常磐津 [原稿]」）

図2 ②邦楽調査掛採譜の五線譜
《子宝三番叟》冒頭



（東京芸術大学附属図書館所蔵
資料名「子宝三番 弦 [原稿]」）

図2 ③邦楽調査掛採譜の五線譜
《子宝三番叟》冒頭



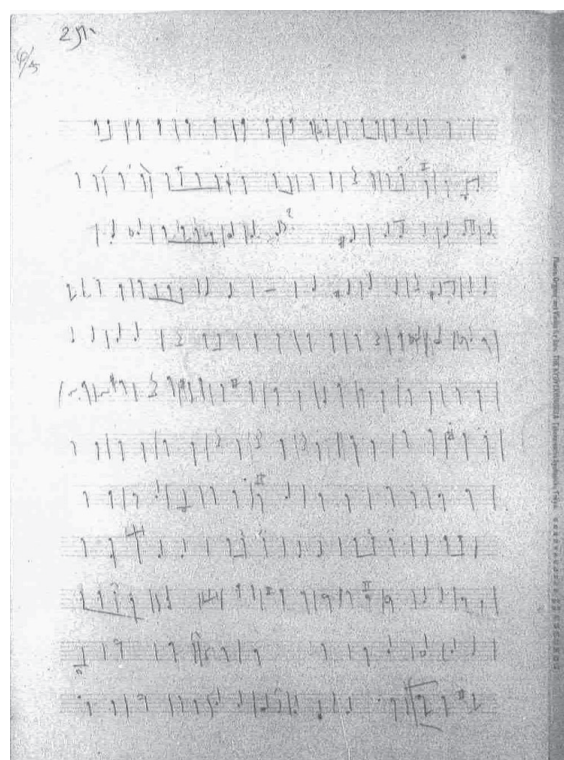
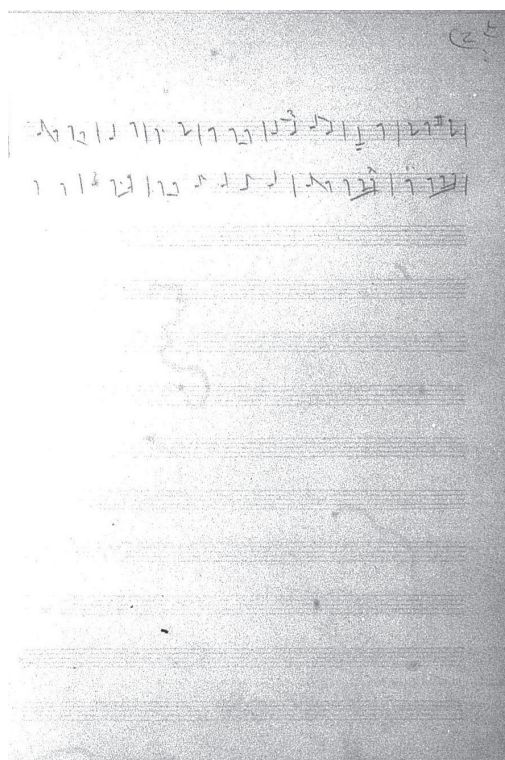
(東京芸術大学附属図書館所蔵)
(資料名「子宝三番叟 [原稿]」)

図2 ④邦楽調査掛採譜の五線譜
《子宝三番叟》冒頭



(東京芸術大学附属図書館所蔵)
(資料名「子宝三番叟：常盤津節」)

図3 ②邦楽調査掛採譜の五線譜
《子宝三番叟》3・4頁



(東京芸術大学附属図書館所蔵)
(資料名「子宝三番 絃 [原稿]」)

表2 邦楽調査掛による常磐津節五線譜作成の過程

(表記は原則として資料による、() 内は筆者付記、■は難読)

No.	年月日	曲名	囃託員欄の押印	記譜者欄の押印	備考 (「」は資料の記述)
1	明治42年 4月27日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、三宅	
2	明治42年 5月 4日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、三宅	
3	明治42年 5月11日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、三宅、本居	
4	明治42年 5月18日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、三宅	
5	明治42年 5月25日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	三宅	
6	明治42年 6月 1日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
7	明治42年 6月 8日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
8	明治42年 6月15日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	三宅	
9	明治42年 6月29日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	三宅、前田	
10	明治42年 7月 6日(火)午後				「常岡氏欠勤ノタメ調査セズ」
11	明治42年 9月14日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	本居	
12	明治42年 9月21日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
13	明治42年 9月28日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
14	明治42年10月 5日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
15	明治42年10月12日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
16	明治42年10月19日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
17	明治42年10月26日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者前田氏」
18	明治42年11月 9日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
19	明治42年11月16日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「文字太夫代理 常磐津豊蔵」
20	明治42年11月25日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、三宅	「文字太夫代理 常磐津豊蔵」
21	明治42年12月 7日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
22	明治42年12月14日(火)午後	関の扉 下の巻	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
23	明治43年 1月18日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
24	明治43年 1月25日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
25	明治43年 2月 1日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	本居	「記譜 本居氏」
26	明治43年 2月 8日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
27	明治43年 2月22日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
28	明治43年 3月 1日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	本居	「記譜 本居氏 前田氏」
29	明治43年 3月 8日(火)午後				「常岡氏 前田氏 欠勤」
30	明治43年 3月22日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
31	明治43年 3月29日(火)午後	子宝三番	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
32	明治43年 4月 5日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
33	明治43年 4月12日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
34	明治43年 4月19日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
35	明治43年 4月26日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
36	明治43年 5月 3日(火)午後	子宝三番叟	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
37	明治43年 5月10日(火)午後	子宝三番叟 関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
38	明治43年 5月17日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
39	明治43年 5月24日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
40	明治43年 6月 7日(火)午後	将門	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
41	明治43年 6月14日(火)午後	まさかど	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
42	明治43年 6月21日(火)午後	まさかど	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
43	明治43年 7月 5日(火)午後	まさかど	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
44	明治43年 9月13日(火)午後	おしどり	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
45	明治43年 9月20日(火)午後	いもせどり	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
46	明治43年 9月27日(火)午後	いもせどり	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、本居	「外に老松 前弾半バまで」 「記譜 前田氏 老松 本居氏」
47	明治43年10月11日(火)午後	おし鳥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
48	明治43年10月18日(火)午後	おし鳥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
49	明治43年10月25日(火)午後	おし鳥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
50	明治43年11月 1日(火)午後	おし鳥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
51	明治43年11月 8日(火)午後				「常岡氏欠勤」
52	明治43年11月15日(火)午後	おし鳥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
53	明治43年11月22日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
54	明治43年11月29日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
55	明治43年12月 6日(火)午後	老松	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	本居	「記譜 本居氏」
56	明治43年12月13日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
57	明治43年12月20日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	三宅、前田	「記譜 前田氏 三宅氏」
58	明治44年 1月17日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
59	明治44年 1月24日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤」
60	明治44年 1月31日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
61	明治44年 2月 7日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
62	明治44年 2月14日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
63	明治44年 2月21日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
64	明治44年 2月28日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
65	明治44年 3月 7日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
66	明治44年 3月14日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
67	明治44年 3月21日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
68	明治44年 3月28日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤」
69	明治44年 4月 4日(火)午後	関の扉	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
70	明治44年 4月11日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤」
71	明治44年 4月25日(火)午後				「常岡氏欠勤」
72	明治44年 5月 2日(火)午後				「常岡氏欠勤」
73	明治44年 5月 9日(火)午後	山姥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	三宅	「記譜 三宅氏 前田氏欠勤」
74	明治44年 5月23日(火)午後	大江山	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
75	明治44年 5月30日(火)午後				「記譜者 前田氏 常岡氏欠勤ニ付調査セズ」
76	明治44年 6月 6日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
77	明治44年 6月13日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
78	明治44年 6月20日(火)午後	大江山入 (山姥)	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
79	明治44年 6月27日(火)午後				「常岡氏欠勤」
80	明治44年 7月 4日(火)午後				「常岡氏欠勤」
81	明治44年 9月12日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤」
82	明治44年 9月19日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
83	明治44年 9月26日(火)午後				「常岡氏 前田氏 欠勤ニ付調査セズ」
84	明治44年10月 3日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」

85	明治44年10月10日(火)午後	山姥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
86	明治44年10月17日(火)午後				
87	明治44年10月24日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
88	明治44年10月31日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
89	明治44年11月 7日(火)午後	山姥大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
90	明治44年11月13日(火)午後	山姥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
91	明治44年11月21日(火)午後	山姥大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
92	明治44年11月28日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
93	明治44年12月 5日(火)午後	山姥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
94	明治44年12月12日(火)午後				「常岡氏欠勤」
95	明治44年12月19日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
96	明治45年 2月 6日(火)午後	大江山入り	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
97	明治45年 2月13日(火)午後				「常岡氏欠勤」
98	明治45年 2月20日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
99	明治45年 2月27日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
100	明治45年 3月 5日(火)午後				「常岡氏欠勤」
101	明治45年 3月12日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「前田氏 記譜」
102	明治45年 3月19日(火)午後	戻り籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
103	明治45年 3月26日(火)午後	戻り籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
104	明治45年 4月 2日(火)午後				「常岡氏欠勤ニ付常磐津調査セズ」
105	明治45年 4月 9日(火)午後	戻り籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
106	明治45年 4月16日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニ付前田氏出勤セシモ休業」
107	明治45年 4月23日(火)午後			前田	「常岡丑五郎欠勤ニ付調査セズ」
108	明治45年 4月30日(火)午後				「常岡丑五郎欠勤ニ付調査セズ」
109	明治45年 5月 7日(火)午後				「常岡氏欠勤ニ付調査セズ」
110	明治45年 5月14日(火)午後				「常岡氏欠勤」
111	明治45年 5月21日(火)午後				「常岡丑五郎欠勤ニ付調査セズ」
112	明治45年 5月28日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤」
113	明治45年 6月 4日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤」
114	明治45年 6月11日(火)午後				「常岡氏欠勤ニ付常磐津調査セズ」
115	明治45年 6月18日(火)午後				「常岡丑五郎ハ欠勤ノ為メ前田氏出勤シタルモ休業」
116	明治45年 6月25日(火)午後				「常岡氏欠勤前田氏出勤」
117	明治45年 7月 2日(火)午後				「常岡氏欠勤ニテ前田氏出勤シタルモ調査セズ」
118	明治45年 7月 9日(火)午後				「常岡氏欠勤」
119	大正元年 7月17日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
120	大正元年 7月24日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
121	大正元年10月 1日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜 前田氏」
122	大正元年10月 8日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
123	大正元年10月15日(火)午後	戻籠色相肩	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
124	大正元年10月22日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜 前田氏」
125	大正元年10月29日(火)午後				「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡丑五郎氏欠勤ニ付常磐津調査セズ」
126	大正元年11月 5日(火)午後	戻り籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
127	大正元年11月12日(火)午後	戻籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
128	大正元年11月19日(火)午後				「常磐津ハ常岡丑五郎氏欠勤ニ付前田氏出勤シタルモ調査セズ」
129	大正元年11月26日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
130	大正元年12月10日(火)午後				「記譜者前田氏出勤セシモ常磐津文字太夫欠勤ニ付調査セズ」
131	大正元年12月17日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
132	大正元年12月24日(火)午後				「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニ付調査セズ」
133	大正 2年 1月14日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田助教授」
134	大正 2年 1月21日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田助教授」
135	大正 2年 1月28日(火)午後	(伝授の雲龍)	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田助教授」
136	大正 2年 2月 4日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	三宅	「記譜者前田氏病氣欠勤ニ付三宅氏替リテ記譜セリ」
137	大正 2年 2月11日(火)午後				「紀元節ニ付休業」
138	大正 2年 2月18日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田助教授」
139	大正 2年 2月25日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニ付調査セズ」
140	大正 2年 3月 4日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ノ為メ調査セズ」
141	大正 2年 3月11日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田助教授」
142	大正 2年 3月18日(火)午後	蜘蛛ノ糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
143	大正 2年 3月25日(火)午後	蜘蛛糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	
144	大正 2年 4月 1日(火)午後	蜘蛛糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
145	大正 2年 4月 8日(火)午後	蜘蛛糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
146	大正 2年 4月15日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニ付調査セズ」
147	大正 2年 4月22日(火)午後	蜘蛛糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田助教授」
148	大正 2年 4月29日(火)午後	蜘蛛の糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田助教授」
149	大正 2年 5月 6日(火)午後				「常岡丑五郎氏病氣欠勤ニ付休ミ」
150	大正 2年 5月13日(火)午後	蜘蛛の糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
151	大正 2年 5月20日(火)午後	蜘蛛糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
152	大正 2年 5月27日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニ付前田氏ニ通知シ常磐津休ミ」
153	大正 2年 6月 3日(火)午後				「常岡丑五郎氏出勤セシモ前田助教授欠勤ニツキ休ミ」
154	大正 2年 6月10日(火)午後				「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡丑五郎氏欠勤ニ付休ミ」
155	大正 2年 6月17日(火)午後	蜘蛛糸梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」

156	大正 2年 6月24日(火)午後	蜘蛛絲梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
157	大正 2年 7月 1日(火)午後				「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニ付休ミ」
158	大正 2年 7月 8日(火)午後				「常岡丑五郎氏出勤セシモ前田氏欠勤ニツキ調査セズ」
159	大正 2年 9月16日(火)午後	蜘蛛絲梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
160	大正 2年 9月23日(火)午後	蜘蛛絲梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
161	大正 2年 9月30日(火)午後	蜘蛛絲梓弦	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
162	大正 2年10月 7日(火)午後				「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニ付常磐津休ミ」
163	大正 2年10月 7日(火)午後				「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニ付休ミ」
164	大正 2年10月28日(火)午後	心中浮名の鯨鞘	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
165	大正 2年11月 4日(火)午後	浮名の鯨鞘			「記譜者 前田氏」
166	大正 2年11月11日(火)午後	浮名の鯨鞘			「記譜者 前田氏」
167	大正 2年11月18日(火)午後				「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニ付常磐津休ミ」
168	大正 2年11月25日(火)午後				「常岡氏欠勤」
169	大正 2年12月 2日(火)午後	心中浮名の鯨鞘	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
170	大正 2年12月 9日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
171	大正 2年12月16日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
172	大正 2年12月23日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)		「記譜者 前田氏」
173	大正 3年 1月20日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
174	大正 3年 1月27日(火)午後	浮世(名)の鯨鞘	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者前田氏」
175	大正 3年 2月 3日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者前田氏」
176	大正 3年 2月10日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
177	大正 3年 2月17日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
178	大正 3年 2月24日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
179	大正 3年 3月 3日(火)午後			前田	「常磐津ハ記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤の為メ休ミ」
180	大正 3年 3月10日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
181	大正 3年 3月17日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
182	大正 3年 3月24日(火)午後	お妻八郎兵衛		前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
183	大正 3年 3月31日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
184	大正 3年 4月 7日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休」
185	大正 3年 4月14日(火)午後				「魔朝中ニツキ御遠慮申上休ミ」
186	大正 3年 4月21日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
187	大正 3年 4月28日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
188	大正 3年 5月 5日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
189	大正 3年 5月12日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ常磐津調査休ミ」
190	大正 3年 5月19日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ常磐津休ミ」
191	大正 3年 5月26日(火)午後			前田	「一昨日昭憲皇太后陛下御大葬ニツキ本日休ミ」
192	大正 3年 6月 2日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
193	大正 3年 6月 9日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
194	大正 3年 6月16日(火)午後	お妻八郎兵衛	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
195	大正 3年 6月23日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
196	大正 3年 6月30日(火)午後	戻駕	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「絃再調」
197	大正 3年 7月 7日(火)午後	戻り籠	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「哥、絃再調」
198	大正 3年 9月15日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
199	大正 3年 9月22日(火)午後	善知鳥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
200	大正 3年 9月29日(火)午後			前田	「常磐津ハ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
201	大正 3年10月 6日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「絃哥 再調」
202	大正 3年10月13日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「絃哥 再調査」
203	大正 3年10月20日(火)午後			前田	「常磐津ハ記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
204	大正 3年10月27日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田本居両氏」「絃哥再」
205	大正 3年11月 3日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田本居両氏」「絃哥再調査」
206	大正 3年11月10日(火)午後			前田	「常磐津ハ前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
207	大正 3年11月17日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田本居両氏」「哥 絃再調」
208	大正 3年11月24日(火)午後			前田	「前日ノ展覧会残務ニツキ休ミ」
209	大正 3年12月 1日(火)午後	関の扉 下の巻	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「哥、絃 再調」
210	大正 3年12月 8日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田本居両氏」「哥、絃再調査」
211	大正 3年12月15日(火)午後	伝授の雲龍	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田本居両氏」
212	大正 3年12月22日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
213	大正 4年 1月12日(火)午後			前田	「(去年来より冬季休業処引続キ休)前日に引続キ休ミ」
214	大正 4年 1月19日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
215	大正 4年 1月26日(火)午後	関の扉 下		前田	「記譜者 前田氏」

216	大正 4年 2月 2日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
217	大正 4年 2月 9日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
218	大正 4年 2月16日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
219	大正 4年 2月23日(火)午後			前田	「常磐津ハ本日他ニ会議アリシヲメテ休ミ」
220	大正 4年 3月 2日(火)午後				「常岡丑五郎氏前田久八氏両氏欠勤ニツキ休ミ」
221	大正 4年 3月 9日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤セシモ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
222	大正 4年 3月16日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
223	大正 4年 3月23日(火)午後			前田	「前田常岡両氏欠勤ニテ休ミ」
224	大正 4年 3月30日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
225	大正 4年 4月 6日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
226	大正 4年 4月13日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
227	大正 4年 4月20日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
228	大正 4年 4月27日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
229	大正 4年 5月 4日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
230	大正 4年 5月11日(火)午後			前田	「記譜者前田氏出勤シタルモ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
231	大正 4年 5月18日(火)午後			前田	「常磐津文字太夫欠勤ニツキ休ミ」
232	大正 4年 5月25日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
233	大正 4年 6月 1日(火)午後				「常岡前田両氏出勤シタルモ他に邦楽会ニツキ会議アリ故ニ調査休ミ」
234	大正 4年 6月 8日(火)午後	四天王大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「弦 哥 再調」
235	大正 4年 6月15日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
236	大正 4年 6月22日(火)午後	四天王大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
237	大正 4年 6月29日(火)午後			前田	「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
238	大正 4年 7月 6日(火)午後	四天王大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
239	大正 4年 7月21日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
240	大正 4年 7月28日(火)午後	四天王大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
241	大正 4年10月 5日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
242	大正 4年10月12日(火)午後	四天王大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田、本居	「記譜者 前田本居両氏」「哥、絃再調」
243	大正 4年10月19日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
244	大正 4年10月26日(火)午後	月の貢	坂田 (2代目今藤長三郎)	三宅	「長唄／常磐津」「記譜三宅氏 臨時調査シタリ 常磐津欠勤ニツキ休ミ」
245	大正 4年11月 2日(火)午後				「調査ハ御大■奉祝哥■(御)調ニツキ休ミ」
246	大正 4年11月16日(火)午後				「大饗当日ニツキ休ミ」
247	大正 4年11月23日(火)午後			前田	「記譜者出勤シタルモ(常岡丑五郎氏)欠勤ニツキ休ミ」
248	大正 4年11月30日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
249	大正 4年12月 7日(火)午後	大江山入	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「弦 哥 再調」
250	大正 4年12月14日(火)午後				「常磐津ハ前田氏欠勤ニツキ常岡氏通知シテ休ミ」
251	大正 5年 1月25日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休ミ」
252	大正 5年 2月 1日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
253	大正 5年 2月 8日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
254	大正 5年 2月15日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
255	大正 5年 2月22日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
256	大正 5年 2月29日(火)午後				「常岡氏病欠欠席」
257	大正 5年 3月 7日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
258	大正 5年 3月14日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
259	大正 5年 3月21日(火)午後				「本日春季皇霊祭ニツキ休ミ」
260	大正 5年 3月28日(火)午後				
261	大正 5年 4月 4日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
262	大正 5年 4月 4日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
263	大正 5年 4月11日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
264	大正 5年 4月18日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
265	大正 5年 4月25日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
266	大正 5年 5月 2日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
267	大正 5年 5月 9日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
268	大正 5年 5月16日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
269	大正 5年 5月23日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
270	大正 5年 5月30日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
271	大正 5年 6月 6日(火)午後			前田	「常磐津ハ常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
272	大正 5年 6月13日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
273	大正 5年 6月20日(火)午後			前田	「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
274	大正 5年 7月 4日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休ミ」
275	大正 5年10月17日(火)午後				「本日神嘗祭ニツキ休ミ」
276	大正 5年10月24日(火)午後	大江山	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」「哥 弦 再調」
277	大正 5年10月31日(火)午後				(「本日天長節祝日ニツキ休ミ」)
278	大正 5年11月 7日(火)午後	山姥	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
279	大正 5年11月14日(火)午後				「来ル十六日皇后陛下本校ニ行啓アラセラルヽニ付準備中ニテ休ミ」
280	大正 5年11月21日(火)午後			前田	「常岡前田両氏出勤シタルモ■■■アリテ休」
281	大正 5年11月28日(火)午後	恋中車初音の旅	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」

282	大正 5年12月 5日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
283	大正 5年12月 5日(火)午後	千本桜道行	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
284	大正 5年12月19日(火)午後	道行千本桜	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
285	大正 6年 1月16日(火)午後				「冬季休業中より休み」
286	大正 6年 1月23日(火)午後				「常磐津ノ調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
287	大正 6年 1月30日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
288	大正 6年 2月13日(火)午後				「常磐津文字太夫欠勤ニツキ休み」
289	大正 6年 2月20日(火)午後				「常磐津文字太夫欠勤ニツキ休み」
290	大正 6年 2月27日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
291	大正 6年 3月 6日(火)午後				「常磐津文字太夫病欠勤 前田氏病欠勤」
292	大正 6年 3月13日(火)午後	千本桜道行	常岡 (6代目常磐津文字太夫)	前田	「記譜者 前田氏」
293	大正 6年 3月20日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
294	大正 6年 3月27日(火)午後				「常磐津ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
295	大正 6年 4月 3日(火)午後				「本日ハ神武天皇祭ニツキ休み」
296	大正 6年 4月10日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
297	大正 6年 4月17日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
298	大正 6年 4月24日(火)午後				「常磐津ハ是常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
299	大正 6年 5月 1日(火)午後				「常磐津節ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
300	大正 6年 5月 8日(火)午後				「常磐津節ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
301	大正 6年 5月15日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
302	大正 6年 5月22日(火)午後				「常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
303	大正 6年 5月29日(火)午後				「常岡氏欠勤ニツキ休み」
304	大正 6年 6月 5日(火)午後				「本日常岡氏欠勤ニツキ休み」
305	大正 6年 6月 5日(火)午後				「常磐津ノ調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
306	大正 6年 6月12日(火)午後				「常磐津ノ調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
307	大正 6年 6月26日(火)午後				「常磐津節ノ調査ハ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
308	大正 6年 7月 3日(火)午後				「右ハ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
309	大正 6年 7月10日(火)午後				「常磐津調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
310	大正 6年 9月11日(火)午後				「午後常磐津ノ調査ハ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
311	大正 6年 9月18日(火)午後				「常磐津節ノ調査ハ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
312	大正 6年 9月25日(火)午後				「常磐津節ノ調査ハ常岡丑五郎氏欠勤ニツキ休み」
313	大正 6年10月 2日(火)午後				「常磐津節ノ調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
314	大正 6年10月 9日(火)午後				「常磐津節ノ調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
315	大正 6年10月16日(火)午後				「常磐津節ノ調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
316	大正 6年10月23日(火)午後				「常磐津節調査ハ常岡氏欠勤ニツキ休み」
317	大正 6年10月30日(火)午後				「囃子」「北村細谷弘田前田兼常諸氏出席囃子鳴物ニツキ調査シタリ」
以降、大正7～15(昭和元)年の目録には常磐津節採譜の記録なし					
318	昭和 2年 6月15日(水)午後	(鴛鴦容姿の正夢)			「鴛鴦容姿正夢 浄写スミ」
319	昭和 2年 6月17日(金)午後	四天王大江山入 下			「前田久八 作譜 再調」
320	昭和 2年 6月20日(月)午後	老松 前弾			「全部 再調 浄写スミ」
321	昭和 2年 6月23日(木)午後	千本桜			「歌絃 再調 浄写」
322	昭和 2年 6月29日(水)午前	蜘蛛絲梓弦			「全部 再調 浄写ズミ」
323	昭和 2年 6月30日(木)午前	御代の秋			「浄写ズミ」
324	昭和 2年 7月 1日(水)午前	伝授の雲龍			「歌絃 再調 浄写」
325	昭和 2年 7月 7日(木)午前	心中浮名の鯨轡			「歌絃 全部 再調 浄写」
326	昭和 3年 1月12日(木)午前				「調査成績書ヲ作成シ報告ス」

表5 邦楽調査掛作成の常磐津節五線譜所蔵状況

【表1】 との対応	【表2】 との対応No.	邦楽調査掛作成の常磐津節五線譜			備考
		資料記載に基づく曲名等 (《 》は本名題、○付き数字は筆者による)	採譜年月	その他の五線譜記載事項	備考
A-1 → A-2 →	1～5 30～37	①《子宝三番叟》【図2①】 子宝三番叟 絃：常磐津（原稿 写）	不明	邦楽調査掛 採譜：三宅	【表2】No. 1～5のいずれも可能性あり。
		②《子宝三番叟》【図2②】 子宝三番 絃（原稿 写）	不明	邦楽調査掛	【表2】No. 1～5のいずれも可能性あり。
		③《子宝三番叟》【図2③】 子宝三番叟（原稿 写）	不明	邦楽調査掛	【表2】No. 1～5のいずれも可能性あり。
-	-	④《子宝三番叟》【図2④】 子宝三番叟：常磐津節（写）	大正5	採譜：常磐津文字太夫、本居長世、前田久八 邦楽調査掛	【表1】A-1、A-2のいずれも可能性なし。 【表2】No. 1～5のいずれも可能性なし。
B-1 → B-2 → - →	6～9、11～21 53・54、56～58、 60～67 69	①《積恋雪閑扉》 積恋閑の扉：常磐津 絃（原稿 写）	不明	邦楽調査掛 採譜：前田久八	ほかに【表2】No. 22、209、215に《積恋雪閑扉下》あり。
C-1 → - →	23～28 38～43	①《忍夜恋曲者》 忍夜恋曲者：常磐津 絃（原稿 写）	不明	邦楽調査掛 採譜：前田久八	
C-2 C-3 C-4	- - -	②《忍夜恋曲者》 忍夜恋曲者（原稿 写）	不明	邦楽調査掛	
D → - →	44～52 318	①《鶯鶯容姿の正夢》 鶯鶯容姿正夢：常磐津節（写） 未定稿	不明	邦楽調査掛	【表2】No. 318は浄写
		②《鶯鶯容姿の正夢》 伊毛勢止利：常磐津（原稿 写）	不明	邦楽調査掛	
E	320	①《老松》 老松前弾（原稿 写）	不明	採譜：本居 邦楽調査掛	ほかに【表2】No. 55あり。
F-1 F-2、3	73・74、76～78、 82、84・85、 87～92、95・96、 234、236、238、 240、242、249、 276、278 319	①《四天王大江山入》 四天王大江山入（原稿 写）	不明	採譜：常磐津文字太夫、本居長世、前田久八 邦楽調査掛	
		②《四天王大江山入》 四天王大江山入 下：常磐津（写） 未定稿	不明	邦楽調査掛	
G-1 G-2 G-3	98・99、101～103、 105、119～124、 126・127 196・197 -	①《辰鴝色相肩》 辰鴝色相肩（原稿 写）	不明	作曲：常磐津文字太夫 邦楽調査掛	
		②《辰鴝色相肩》 辰鴝色相肩：常磐津節（写）	不明	採譜：常磐津文字太夫、本居長世、前田久八 邦楽調査掛	
H-1 H-2 -	129、131、 133～136、138、141 201・202、204、 205、207、210・ 211 324	①《伝授の雲龍》 傳授の雲龍（原稿 写）	不明	作曲：常磐津文字太夫 邦楽調査掛	【表2】No. 324は浄写
I-1 I-2	281、283・284、 292 321	①《恋中車初音の旅》 恋中車初音の旅：常磐節：未完（写）	不明	採譜：常磐津文字太夫、本居長世、前田久八 邦楽調査掛	【表2】No. 321は浄写
	142・143、 144・145、 147・148、 150・151、 155・156、 159～161	①《蜘蛛絲絃》 蜘蛛絲絃：常磐津節（写） 未定稿	不明	邦楽調査掛	【表2】No. 322は浄写
		②《蜘蛛絲絃》 蜘蛛絲絃：常磐津（原稿 写）	大正2.3	採譜：常磐津文字太夫、本居長世、前田久八 邦楽調査掛	
	164～166、 169～172、 174～176、 180・181、183、 186、188、193・194 325	①《心中浮名の鮫鞘》 心中浮名の鮫鞘：常磐津節（写） 未定稿	不明	採譜：常磐津文字太夫、本居長世、前田久八 邦楽調査掛	【表2】は採譜年月合わず。 【表2】No. 325は浄写
		②《心中浮名の鮫鞘》 心中浮名の鮫鞘：吾妻八郎兵衛：常磐津（原稿 写）	大正2.1	邦楽調査掛	

凡例 「採譜年月」は東京芸術大学附属図書館作成の書誌による。

【主要参考資料】

『日誌B』（邦楽調査掛日誌）全20冊、東京芸術大学附属図書館所蔵、1907～1928年

財団法人芸術研究振興財団／東京芸術大学百年史編集委員会・編『東京芸術大学百年史 東京音楽学
校篇』第二巻、音楽之友社、2003年薦田治子氏「邦楽調査掛平曲五線譜の成立をめぐる」（『東洋音楽研究』47号）21-48頁、東洋音楽学
会、1982年

大久保真利子氏の「邦楽調査掛による長唄の五線譜化―事業の実態と再評価―」（『日本伝統音楽研究 第9号』）京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、5-19頁、2012年

「子宝三番叟 絃：常磐津〔原稿〕」（請求番号：HK10/ⅡK(a)）東京芸術大学附属図書館所蔵

「子宝三番：絃〔原稿〕」（請求番号：HK10/ⅡK(b)）東京芸術大学附属図書館所蔵

「子宝三番叟〔原稿〕」（請求番号：HK10/ⅡK）東京芸術大学附属図書館所蔵

「子宝三番叟：常盤津節」（請求番号：HK10/K）東京芸術大学附属図書館所蔵

《注》

- 1) 大正11（1922）年に四世杵屋弥七が考案した三線譜で、当初は縦書きであったが、その後、横書きのものが現れた。ここに挙げる邦楽社刊行の文化譜はすべて横書きである。三本の線がそれぞれ、下線は一の糸、中線は二の糸、上線は三の糸を表し、各線上に左指先で抑えるポジションすなわち勘所を数字で記す。開放弦は「0」、以降、1、2、3、…とそれぞれ糸に関係なく勘所を示す。各線（糸）によって用いる数字（勘所）は異なるが、一番よく使うのが上線の三の糸で、1～16くらいまで使う。この記譜体系では、0の1オクターブ上が10、1の1オクターブ上が11の勘所に対応する。数字はあくまで勘所と示すので、調弦が変わっても数字は変わらないので、同じ中線（二の糸）の「1」でも本調子と二上りでは音高が変わることになる。
- 2) 長唄研精会およびその系統で採用され、普及したことからその名があるが、考案者である吉住小十郎にちなんで「小十郎譜」とも呼ばれる。また、ここに挙げる常磐津節の《真将門》をはじめ、浅田正徹が採譜したこの記譜体系に基づく楽譜シリーズは「浅田譜」と呼ばれることもある。研精会譜の特徴は、日本の伝統的な音階を西洋の音階にあてはめ、1から7の数字で表したことにある。文化譜と異なり、勘所ではなく相対音高を数字で規定するため、西洋音楽との融通性が高い。音高と数字が対応しているので、例えば調弦が本調子から二上りになると、二の糸の開放弦は「3」から「4#」に変わる。
- 3) 本論文では原則として、本文中では和暦、書誌と生没年は西暦を用いる。
- 4) 「平曲」以外に、「平家」、「平家琵琶」などの種目名を使うことがあるが、本論文では邦楽調査掛の資料における表記に倣って「平曲」を用いた。
- 5) 弘化2－大正5（1845-1916）年。平曲演奏者・研究者。名古屋系の平家は、熱心な愛好家であった津軽藩士の楠美則徳により津軽藩に伝えられたが、館山は楠美則徳の曾孫にあたる。
- 6) その経緯は館山漸之進『平家音楽史』（芸林舎、1974年）に詳しい。
- 7) 実際には『近世邦楽年表』の刊行もこの柱に加わった。
- 8) 財団法人芸術研究振興財団／東京芸術大学百年史編集委員会・編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第二巻、557-558頁、2003年。以下、本論文では本書をたびたび参照するので、『百年史 東京音楽学校篇』第二巻 と略す。
- 9) 五世勘五郎の作曲に《新曲浦島》（兄の16代目六三衛門との共作とも）、《島の千歳》
- 10) 『百年史 音楽学校篇』第二巻、555-556頁。
- 11) 同上、556頁。

- 12) 家元名「十寸見河東」は、現在「河東節十寸見会」が保存している。
- 13) 『百年史 音楽学校篇』第二巻、585-629頁を参照。
- 14) 同書746-749頁、1545-1579頁参照。
- 15) 以上、竹内有一・編『常磐津節演奏者年鑑』第5巻、122頁、常磐津節保存会、2016年による。
- 16) 以後、本論文では「6代目文字太夫」を「文字太夫」と記す。
- 17) 『百年史 音楽学校篇』第二巻、746-749頁、1545-1579頁を参照。
- 18) 『百年史 音楽学校篇』第二巻、659頁、大正3（1914）年の記述による。
- 19) 弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出した手書き報告書による。
- 20) 先述と同じ理由で、続く考察でも本曲は取り上げない。
- 21) 『日誌B』の明治44（1911）年4月4日（【表2】No.69）は、厳密には明治44年度はじめの作業になるが、前年度末の作業が1日だけ次年度にまで掛かったと見ることもできるだろう。

Study concerning Transcription of Staff Notation for *Tokiwazubushi* by Hogaku Chosa-gakari

MAEHARA Megumi

In the study of *tokiwazubushi*, progress has been made in the historical study of its performances and performers, but little has been done from the point of view of music. The author thinks that one large factor for this is that there is no “score” in *tokiwazubushi* that can be considered as a common language. For example, of the official 1 y published scores 6 (of these 2 are only small parts of repertoire) from Hogakusha are in the style of *bunkafu* notation while 1 from Tokiwazu Hyojun-fuhon Kanko-kai is in the style of *kenseikaifu* notation. Such circumstance not only makes the musical study of *tokiwazubushi* difficult but also casts a shade on the promotion and transmission of *tokiwazubushi*.

Fear toward such a situation already existed in the Taisho period. Hogaku Chosa-gakari, an official group involved in the investigation of Japanese music established within the music department of the Imperial Household Ministry (1907-1943 ?) attempted to write *tokiwazubushi* score on the staff notation system. The present paper clarifies the purpose, history and method of that attempt based on material from the archives of the Tokyo University of Arts to consider the significance and issues related to the attempt to write *tokiwazubushi* scores on staff notation system.

This paper is a part of the results obtained from the project of “Grants-in Aid for Scientific Research from the Japan Society for the Promotion of Science (C), ‘Fundamental research for musical analysis of *tokiwazubushi* (18K00158, Maehara Megumi).